

川崎市市制100周年記念 / 川崎市 2024多文化共生フ

「多様性は可能性! みんなで

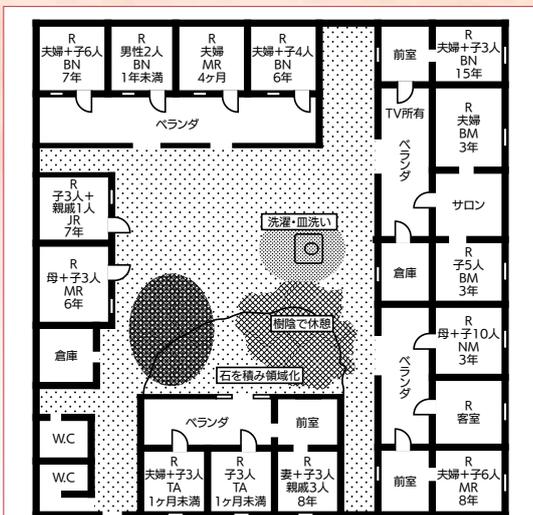
これからの川崎の未来を多文化共生の視

基調講演 お互いに歩み寄る社会のために —わたし・あなたに できることは?—

京都精華大学前学長・教授のウスビ・サコさんがさまざまな体験をもとに多様性や外国人と共に暮らす社会についての話題を提供してくださいました。参加者は、軽妙なサコさんのお話に時に笑いを誘われながら、たくさんの気づきを得ました。

私が生まれ育った社会と、いろいろな人が集う中庭

私が生まれ育ったのはマリ共和国です。大家族がほとんどのマリでは珍しく、兄弟は3人と少なかったのですが、家が都市部にあったのでよく田舎の親戚や知り合いがやってきました。「急ぐ用事はない」と知らないうちに1年間住んでいることもありました。当然、宿泊費も生活費も払いません。その人たちが子どもに「勉強しなさい」とか



「マリの中庭型住宅の事例」
632㎡に11世帯72人が居住。緑陰は基本的に早い者勝ち。
台所は小さいので、調理は各戸前で行う。

「実は勉強しなくても人生成功する」などバラバラなことを言うのです。大人が隣の子どもを気にかけることが大事で、かつての日本の地域社会にもあったらと思う。マリの伝統的な家屋の中庭は、いろいろな人が立ち寄り、生活する場なのです。

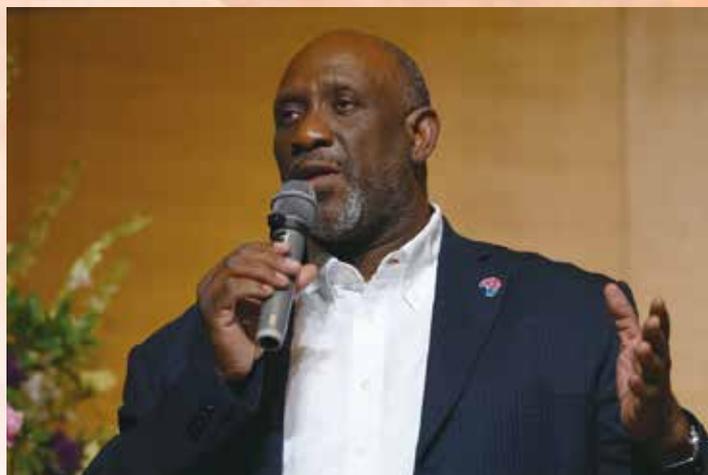
留学生として日本へ、同化ではなく居場所開拓を

高校卒業後に国外に出て、フランスで自分の人種を意識し、カルチャーショックを受けました。初めての留学先は中国で、ストレートにやりとりするから、喧嘩を売ったり買ったりもできて、あまりストレスを感じずに過ごせました。来日したのは1991年で、ちょうど「留学生10万人計画」の頃でした。大学や研究機関はよいのですが、社会で受け入れる準備ができておらず、排他的で、外国人をフレームに入れてしまう問題に直面しました。

外国人はお客さんではありません。社会に参画するため、日本人と外国人が交流する場や日本語教室を作って留学生仲間を支援し、ワールドフェスティバルの開催などにも取り組んできました。私の目的は同化ではなく、居場所開拓であったと言えます。

グローバル化とアイデンティティ

グローバル化は「人や金、情報が国境を超えて自由に行き来する」こと。国際化は一つの国対他の国または一つの国対複数の



国として捉えますが、グローバル化では国の概念を超えて個や集団が存在し、それぞれの価値観を出し合ってぶつかり合います。そのときに認識する必要があるのが多様性です。多様性というのは人種、性別、宗教、性的指向、社会的、経済的背景および民族性などの違いがあること。外国人が増えるからではなく、もともと皆さん多様なのですよ。私が学長の職務に取り組んだときに、マイノリティを優遇することも大事だけれど、マジョリティの意識改革が非常に重要だと実感しました。アイデンティティをしっかりと持つことも大切です。自分と向き合える人は他人を受け入れられます。

遠くに行きたければ皆で進め

「コンヴィヴィアリティ^(注)」という言葉を紹介します。他人を受け入れ一緒に関わって行く、自分のものや場を提供するといった意味があります。日本も含めた近代社会で重視される合理性、効率性ではなく、人にどう喜びを与えるか、自分もそこでどう喜びを得るかということを大切にします。おそらくかつての日本でも、自分のところにやってくる相手を大事にする、自分のご飯や場所を共有する、他者を受け入れる姿勢「おもてなし」があったと思います。

おしまいに、アフリカの言葉「早く行きたければ一人で進め、遠くに行きたければ皆で進め (If you want to go fast, go alone. If you want to go far, go together)」を贈ります。

(注) コンヴィヴィアリティ(自立共生): オーストリアの思想家イヴァン・イリイチが提唱した概念。「共に生きる」という意味で、テクノロジーに隷属せず、自律的に考え、相互依存のなかで他者や道具と共生的に生きることを目指す。

(取材・文: 編集ボランティア 相澤弥生、撮影: 中島貴義、
「マリの中庭型住宅の事例」図提供: ウスビ・サコ)

国際交流センター開設30周年記念

フォーラム・コンサート

「つくる これからのカワサキ」

点から、みんなで一緒に考えてみませんか。



パネルディスカッション 川崎で活躍している方々と考えるこれからのカワサキ

よりよい川崎のために 今やっていること

丹野 ▶ 日本で働く外国人の方が昨年200万人を超えました。10年前の約3倍です。外国人労働者が増えているだけじゃなく、彼らのファミリーも一緒に、まるごと受け入れることを自覚しなければなりません。まずは、皆さんが取り組んでいることを教えてください。

白 ▶ 川崎市の南部を中心に外国につながる子どもたちの学習支援をしています。子どもたち(小中高生)は、親の都合で来日していませんが、親は仕事で忙しいので教科学習と日本語、進学、就活の支援が必要です。また、子どもたちは家庭の貧困および在留資格に困っています。親の事情によって、子どもも在留資格を失うことがあります。安心して日本にいらなければ、将来の夢を語れず学習意欲も湧かないということを、私は学習支援を通して知りました。皆さんにぜひ在留資格・在留カードのことを知ってほしいです。

ヒリストバ ▶ 個人的にプラスチック削減の活動をしています。プラスチックは生活のいたるところに使われている重要素材ですが、人体や環境に悪影響を及ぼします。ドイツでは、以前からプラスチックの回収やリサイクルに成果をあげています。例えばペットボトルはデポジット制^(注1)で回収し、使い捨てのプラスチックは禁止しています。

川崎では「スーパーやコンビニの店頭で回収機械を設置してポイントを付ける」ことを実施しています。新しい取り組みを通して市民の意識をさらに高めることが重要だと思います。

パースボンゴ ▶ 消防団の機能別団員^(注2)として地域と連携して防災のPRや支援をしています。日本に来て台風や地震で不安なとき、団員募集のポスターを見て消防団に入りました。

防災訓練を実施すると、参加者がとても少なく驚きます。災害が起きたらとても困ります。ハザードマップに説明もありますが、見るだけで実際に行動できるでしょうか。2019年に武蔵小杉で水害に遭った人たちも、事前にパンフレットを読んでいても現実にはどうしていいかわかりませんでした。防災の認識を高め、防災訓練に参加する必要があります。

ここが改善されたら、川崎がもっとよくなる!

パースボンゴ ▶ 防災の認識を深め防災訓練への参加を促すために、最大の課題はPRです。SNSやYouTubeも効果的でしょう。私はSNSを提案しましたが、承認を得るのは容易でなく、現在検討中です。また、市内で開かれるさまざまなイベントの会場でもPRし

たらいいと考えます。効果的なPRができれば、防災に強い、よりよい川崎になると思います。

ヒリストバ ▶ プラスチック削減に最も重要なのは、市民の意識だと思います。貢献したい人が増えれば、「私」ではなく「私たち」の行動になり、より大きな規模の活動になります。また、日本ではプラスチックの製品や包装がたくさん作られているので、リサイクルでは限界があります。プラスチックを避けて使わない生活にチャレンジするのはいかがでしょうか。

白 ▶ 行政の仕事をしていると「外国人だからできません」というのを毎日のように聞かれます。実は、地方公務員の仕事の中にも外国人には制限があります。例えば「税金関係の差し押さえ」また「許可を出すこと」など、いわゆる日本国籍の住民に不利益を与える可能性がある仕事は私にはできません。不自由を感じます。少子超高齢化になる将来の日本では、外国人が社会の支え手として存在することが前提になります。多様性が豊かなこのカワサキを住民同士お互いに理解することからもっとよくなりたいと思います。



外国人がいることが 日本が変わるチャンス!

サコ ▶ 外国人は日本社会に入っても、日本人と同じようには見なされません。それがどれくらいストレスなのか、誰も意識しない。日本人マジョリティの意識改革が大事です。日本の社会が変わっていくのに必要な法律も追いついていない。だから外国人がいるというのは、日本が変わるチャンスだと私は思っています。

(注1) 販売代金に預かり金(デポジット)を含めておき、容器を返却すると預かり金を購入者に戻す仕組み。

(注2) 限定された活動をする団員。法律上、外国人は限定のない基本団員になれない。

(取材・文:編集ボランティア 安藤節子、撮影:中島義貴)

パネラー 紹介



丹野清人

川崎市ふれあい館運営協議会委員。川崎市多文化共生社会推進協議会部会委員。東京都立大学人文社会学部人間社会学科社会教室 教授。



白聖豊

中国出身。The Lit Zone Beside(外国につながる子どもたちの学習支援団体)代表。2011年来日。フリースクールで日本語を学び、公立高校・私立大学を経て横浜市職員。



ガブリエラ・ヒリストバ

ブルガリア出身。川崎市の外国人市民代表者会議 第14期委員・部会長、第15期委員。ドイツの大学に在籍中、日本に一年間留学。2017年再来日。



マールレット・パースボンゴ

タイ出身。中原区消防団 機能別団員。6年半前に仕事のために来日。システム開発に従事。